



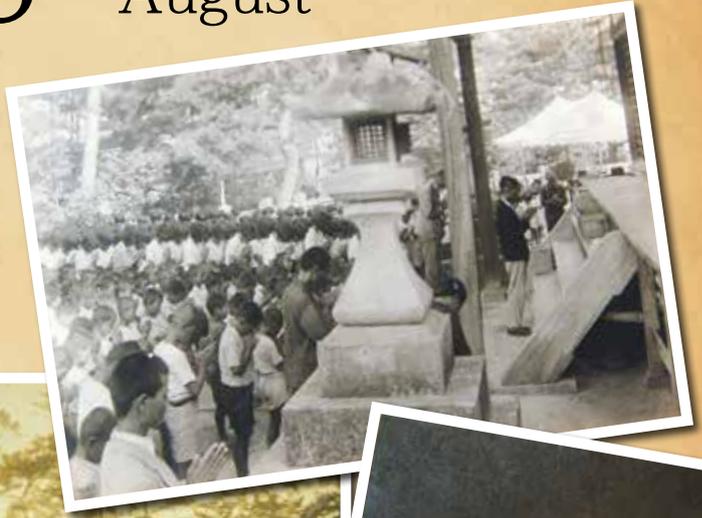
広報  
No.178

# かんおんじ

2020 / 令和2年

# 8

August



特集

## 戦後75年

### 観音寺市の戦争の記憶



柞田川河川敷で食糧増産のための開拓を行う様子（紀伊国民学校）



1944年（昭和19年）の観音寺民間金属特別回収風景。鍋や釜のほか、二宮金次郎像まで集められている

家庭用の飯米通帳と衣料切符（復刻版）



### 生活への影響

1938年（昭和13年）に国家総動員法、翌年に国民徴用令が施行され、戦争のために国が人的・物的資源を統制できるようになりました。1941年（昭和16年）12月に太平洋戦争が始まると、戦時中の標語「欲しがりません勝つまでは」通りの耐久生活が始まりました。

菜や魚などの生鮮食品も配給の対象となり、1943年（昭和18年）にはほとんどの生活物資が配給制となりました。食糧不足を補うため、空き地や小学校の運動場は開墾され、野菜畑となりました。

和田村東部国民学校の当直日誌。軍事訓練や勤労作業の中、大雪の日に子どもたちが運動場ではしゃぐ様子、新しいボールに喜ぶ様子なども記されている。戦線が悪化するに従い、連日のように警戒警報、空襲警報発令の文字が並ぶ



# 特集 戦後75年 観音寺市の戦争の記憶

ことし、終戦から75年を迎えます。終戦の年に生まれた人が75歳となり、戦争の記憶を持つ人がどんどん少なくなっています。しかし、戦争は決して遠い昔の話ではありません。戦争で生活がどのように変わり、観音寺市でどのようなことが起きていたのか。戦争の記憶を風化させてはならないと、観音寺市では2018年（平成30年）に、観音寺市戦争体験記『戦争の記憶―未来への伝言―』を発行しました。この本に収められた数々の記憶と共に、戦争を振り返ってみたいと思います。

\*その他、『豊浜戦部隊の記録（観音寺市文化財保護協会発行）』からも内容を引用



継ぎをしながら着続けた横山さんの幼少期の服。当時は多くの人がこのような手作りの服と草履で登校していた

―私は国民学校の時に着ていた学生服を大事にしています。当時は着るものが何もなく、仕方がないのだけど、この親も子どものために一生懸命作ってくれたのです。火鉢をはじめ全ての金物類から学生の金のボタンまで国に供出させられていました。そのため、服のボタンも力所共違うボタンか竹のボタンに変えさせられていました。

横山 孝博さん（新田町）

写真上…現在の香川県立西部養護学校（出作町）が建つ場所にあった、飛行隊指揮所写真下…現在も家の庭に残る滑走路跡（出作町の高橋さん宅）



現在の市街地航空図で見る、当時の観音寺海軍航空基地の位置図（イメージ）。このほか、栗井町や木之郷町、観音寺町など、各地に倉庫や事務所があった

## 観音寺海軍航空隊と、飛行場の建設

1943年（昭和18年）2月に、軍は日本各地に飛行場を建設して、本土から航空機を発進させることを決意し、香川県でも、林（高松市）、詫間（三豊市）、観音寺の3カ所に軍用飛行場が建設されることになりました。

4月に、広島県の呉海軍工廠施設部の将校はじめ4名が豊田村役場を訪問し、飛行場建設の測量協力を要請しました。柞田村出在家（上出・中出・下出）、常磐村出作南、紀伊村木之郷、栗井村出晴、豊田村池之尻に及ぶ広大な地域でした。

1944年（昭和19年）1月に各地区の関係者が柞田国民学校の講堂に集められ、強制立ち退き移転の説明を受けました。働き盛りの男性が出征している中、老人や女性、子どもなど残された人で、移転先を決め、家屋家財一切を運び出さなければなりません。当時は土葬のため、墓から先祖の遺体を掘

り起こし、新しい地に埋葬したといえます。

トラックなどはなく、大八車や手押し車で、一日に何度も往復。あまりの重労働に、立ち退きの途中で亡くなった人もいました。飛行場で潰された農地は約250ヘクタール、立ち退き移転を余儀なくされた家庭は約350戸に及ぶといわれます。

移転後の1944年（昭和19年）4月ごろ、飛行場造成工事が始まりまりました。特に長さ1500メートル、幅40メートルの滑走路のコンクリートを敷き詰める工事には、地域の学生や住民が動員されました。

しかし、滑走路は終戦までに完成しませんでした。終戦当日の午前中にも、柞田村国民義勇隊60人が滑走路の舗装作業を行っていたといえます。

終戦後に全敷地は返還されましたが、飛行場建設で土地は荒れ、コンクリート敷きの滑走路がそのまま残っている状態。元の生活に戻るためには、さらに多大な苦勞と長い時間が必要でした。

## 観音寺への空襲

1945年（昭和20年）2月7日、米軍機が観音寺沖合に爆弾を投下したのが、香川県への空襲の始まりといわれています。3月19日にはグラマン機延べ80機が詫間と観音寺の航空隊、豊浜の砲部隊を攻撃したほか、進行中の貨物列車や国民学校も銃撃しました。

飛行場は、建設当初から毎日のように米軍機の機銃掃射を受け、伊吹島でも、北浦港のいりこ工場や定期船・伊吹丸が銃撃を受けました。

## 豊浜陸軍船舶幹部候補生隊（暁部隊）

戦争が南方の島々へ拡大し、兵員や兵器、食糧などを海上輸送するため、陸軍では独自に輸送船や輸送用潜水艇などの各種船舶を運用しており、海上輸送等を主な任務とする部隊を置いていました。この「陸軍船舶兵

## 赤トンボ特攻隊

飛行場の建設工事が続く中、1945年（昭和20年）3月に観音寺海軍航空隊が開隊しましたが、ちょうどそのころ、各地の練習航空隊に対し、「中練特攻」の編成が命じられました。中練特攻とは、搭乗訓練未修者が、爆弾を積んだ練習機で敵艦に突入する攻撃のことです。

その練習機は、オレンジイローの機体と二枚翼で飛ぶ格好がトンボの姿そっくりだったことから、「赤トンボ」と呼ばれていました。特攻機に変わったことで、実用機と同じように、濃い緑色の迷彩塗装に変えられました。鋼管骨組みの木製プロ

—飛行場へ近いためか、真上を飛行機が通ることもあった。空襲警報がよく鳴った。グラマン戦闘機10機ぐらいが編隊を組んで、そのうちの5機ぐらいが編隊を離れ、こっちに向かって撃ってきた。大きな音がし、耳が裂けるかと思った。葉きょうが30センチくらいあって、弾が50ミリくらいの機関砲だった。

熊谷 富男さん（出作町）

—その頃、若い17、8歳の飛行士が赤トンボと呼ばれた二重の羽の飛行機で練習をしていたのですが、それがよく落ちるのです。練習生は200人ほどいて、交代で飛ぶのですが、回転させて宙返りをしたら、途中でプスプスと落ちてきます。100メートルも200メートルも上から落ちるのだから、乗っていた人は亡くなっていたでしょう。それを間近で見っていました。それが戦争というものなんです。

土井 義晃さん（池之尻町）



豊浜暁部隊の正門



ふるさと学芸館の平和の部屋に展示している、赤トンボの胴体骨組み一部

—この時兄さんは「それでは行ってきます、覚よ！後を頼むよ」と言ってじっと目を合わせたことは忘れられません。「それでは征きます。今日までありがとうございました」とは言えない心の内が、痛いほど胸に響きました。

田中 覚さん（豊浜町）

\* 海上挺進隊として戦場に向かった兄 三徳さんとの最後の面会で



野口 雅澄さん(柞田町)

1937年(昭和12年)8月生まれ。県立高校の国語教師を務める傍ら、古典や俳諧、郷土史の研究を行う。山崎宗鑑の一代記『俳諧の風景』で第16回香川菊池寛賞を受賞。現在も三豊准看護学院で国語講師を務める。

INTERVIEW

戦争遺跡や戦没者の調査・研究を行う野口雅澄さんにお話を聞きました。

戦没者を2回殺してはいけない

戦没者の数や名前だけではなく、その人がいつ、どこでどのように亡くなったのかを知りたいと思い、毎日5時間、電動自転車で西讃地域を端から端まで走り回って、軍人墓地を訪ねています。

多くの墓石には、死没年月日や場所、死没理由が刻まれています。ふと市内の墓地を訪ねたら、終戦後に36歳でシンガポールで刑死と記された墓を見つけ、ショックで動けなくなったことがあります。また、身寄りがない人などは、「戦死」とすら書かれず、単に「没」としか書かれていないこともあり

ます。国を守るために亡くなった人について無関心で見殺しにしたら、2回殺したことになる。彼らのことを記録に残したいと思い、一人ひとり墓地を訪ね、こつこつまとめてきた資料をこの夏に出版する予定です。

せめて8月15日の終戦日前後は、郷土の戦争遺跡を見て、お年寄りの話を聞き、戦争に関心を持ってもらいたい。今の平和は、戦争で亡くなった人、傷付いた人々の上に成り立っているものだとすることを忘れてはいけません。



一の宮海岸での訓練の様子

科」は通称「暁部隊」と呼ばれ、各地に設置されていました。このうち、豊浜では1943年(昭和18年)に、船舶隊の幹部将校と下士官を養成するための機関が富士紡績豊浜工場と和田東部国民学校の校舎の一部に設立され、翌年の4月に開校しました。以降、終戦までの約1年4カ月の間に、豊浜で生活した隊員や教官は約5800人に上ります。兵舎外に住むことが認められた人は、近隣町村民家などの空室に宿泊し、多くは徒歩や自転車



一の宮公園の松林の中に建つ候補生像。かつて豊浜暁部隊にいた候補生を中心に発足した「豊浜会」が建立した

で出勤していました。稲刈りや豊浜八幡神社の秋祭りに参加して太鼓台やみこしを担ぐなど、地元で溶け込んだ存在だったようです。当初、船舶兵科は物資や兵器の輸送などを主な任務としていましたが、戦局の悪化に伴い、一部に特別な攻撃任務が課せられることになりました。敵輸送船団に小型舟艇で接近し、爆破するという攻撃でした。この攻撃用の小型舟艇は、本来の使用目的を隠すため、連絡用の舟という意味で①(マルレ)と呼ばれました。長さ5・6メートル

市内の飛行場の歴史と戦争の悲惨さを伝えようと「愛と心を語り継ぐ会」が作成する絵本『柞田飛行場』。野口さんも参加し、年内に完成予定



ふるさと学芸館イベント 「平和へと羽ばたく折り鶴」



未来を生きる人たちが安心して暮らしていけるよう、平和への願いを込めたメッセージを募集しています。頂いたメッセージの一部はホームページで紹介するほか、書かれた紙を折り鶴にし、オブジェとしてふるさと学芸館に展示します。市内外を問わず、誰でも参加できます。皆さんのメッセージをお待ちしています。

●メッセージの送付方法  
ふるさと学芸館で専用紙に記入するか、市ホームページにある様式に記入して下記までメールで送付してください。  
●受付期間 8月14日(金)まで  
問い合わせ先  
同館 ☎24-8123  
メール furusatogakugeikan@snow.ocn.ne.jp



文化振興課 ☎23-3943  
メール bunka@city.kanonji.lg.jp

平和祈念の黙とうをささげましょう

原爆死没者など、大戦において亡くなられた人々を追悼し、平和を祈念するため、黙とうをささげましょう。

- 広島、長崎に原爆が投下された日  
日時 8月6日(木)午前8時15分から1分間  
8月9日(日)午前11時2分から1分間
- 戦没者を追悼し、平和を祈念する日  
日時 8月15日(土)正午から1分間

原爆被爆パネル展  
高校生平和ポスター展  
日時 8月6日(木) ~14日(金)  
場所 市役所1階エントランスホール

問い合わせ先 危機管理課 ☎23-3940  
FAX 23-3920

戦争の記憶をつなぐ  
観音寺市に陸海軍の部隊があったことや、飛行場の建設がされていたことなどは、あまり知られていません。  
戦後75年が過ぎ、戦争の記憶を持つ人はどんどん少なくなっています。身近に戦争を体験した人がいたら、ぜひ話を聞いてください。平和な世に生きる私たちに、過去の戦争の記憶を受け継ぎ、次の世代へ語り継いでいく責任があります。

戦争の記憶  
未来への伝言  
定価2000円(税込み)

観音寺市戦争体験記『戦争の記憶』

戦争体験者の証言や、市内に残る戦争遺跡や関係資料などをまとめた本です。戦争の記憶を受け継ぐために、ぜひご一読ください。文化振興課や大野原、豊浜両中央公民館、ふるさと学芸館で販売しているほか、市内各図書館で貸し出ししています。

問い合わせ先 文化振興課 ☎23-3943  
FAX 23-3956  
メール bunka@city.kanonji.lg.jp

